

飛鳥浄御原宮

正殿は飛鳥時代最大級

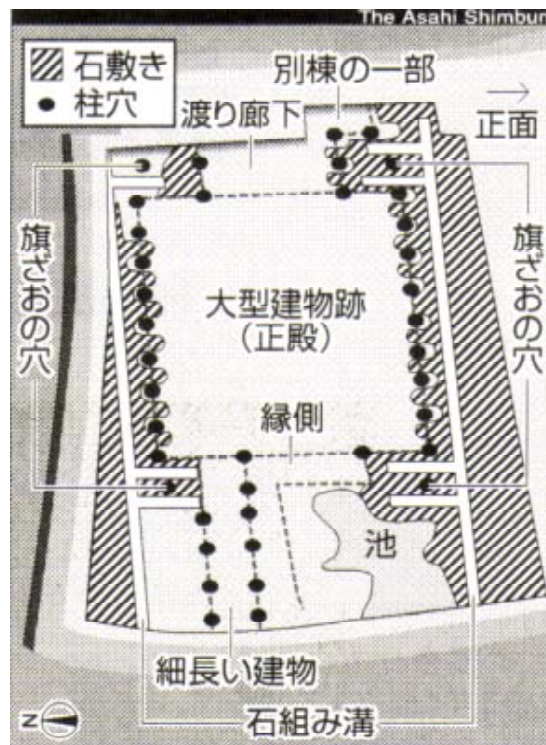
東西 23.5 メートル 南北 12.4 メートル

奈良県明日香村の飛鳥
きよみはらのみや
京跡で、飛鳥浄御原宮

(672～694年)の正殿跡の全体が発掘され、東西23.5メートル、南北12.4メートルの高床建物だったことがわかった。県立橿原考古学研究所が8日、発表した。飛鳥時代最大級の建物で、渡り廊下でつながった別棟、池を望む縁側がついた建物跡も出土。天武天皇の正月の宴



飛鳥浄御原宮の正殿跡。石敷きのない丸い部分が柱の跡=奈良県明日香村で、朝日新聞本社へりから



の様子を伝える日本書紀の記述を裏付ける配置だった。正殿跡は昨年、広大な石敷き広場とともに一部が出土、「天武天皇の皇居」とされる。

正殿は切り妻造りで、南東約200メートルで見つまっている大極殿跡（東西29メートル、南北15メートル）に次ぐ規模。周囲は石敷きで、四隅には直径60センチの穴があった。平城宮の大極殿前には旗を掲げた柱があったことがわかっており、同様の柱が立っていたとみられる。

東側には別棟（東西6メートル以上、南北12.4メートル）があり、渡り廊下（東西6.2メートル、南北5.4メートル）でつながっていた。西側には縁側と細長い建物（東西9メートル以上、南北3.1メートル）があった。周囲やくぼみの形状から池のある庭園が近くにあったとみられ、縁側から眺めることができたらしい。

日本書紀には天武天皇が住んだ飛鳥浄御原宮について「681年正月、天皇が向 むかひのこあんの 小殿で宴を催し、
うちのあんの 皇子らを内安殿に招いた。臣下は外安殿で酒を振る舞われ、舞楽を楽しんだ」と記されている。

正殿跡の南にはさく跡があり、その外で正殿よりやや小さい建物跡が出土している。これが臣下を集めた外安殿で、正殿跡が内安殿、東側の別棟が向小殿にあると指摘する専門家もいる。

(朝日新聞 2005.3.9 朝刊 第38面 13版)